山梨医大紀要　第4巻, 43－51(1987)

新約聖書の生命観

川田　殖

新約聖書の生命観は旧約のそれを前提し、ある点でそれにとって代っている。本稿は新約聖書記者の関係記事を検討して、そこに見られる生命観の特質を明らかにしようとする試みである。イエスの奇蹟物語と譬話の叙述には、生命の創造者・維持者たる神との正しい関係に人を生かす「神の国」の現実的到来の事実が示されている。また初めからイエスを霊的存在としてとらえたパウロにとって、イエスは救い主・キリストであるとともに、人間生命のいっそう大きな広がりを啓示する存在であった。福音書記者ヨハネにとってイエスは神の子であり、神に至る道であり、復活であり、生命であり、彼を信ずる者は死を味わうことなき「神の国」で永遠の生命を現に受けている。以下この枠組の中で新約聖書の病気観、死生観、復活観が論じられ、キリスト教の信仰・希望・愛の究極的基礎たる終末論的生命観の検討をもって結ばれる。

キーワード：新約聖書、生命観、霊

1.

こんにち新約聖書といわれる文書には、四つの福音書、使徒行伝、パウロの書簡、いわゆる公同書簡、および黙示録が含まれている。これらがキリスト教において新約聖書（NovumTestamentum）と呼ばれるようになったのは、テルトゥリアヌス（c.160-c.235）によってである。[1] しかしその根拠はパウロが、「第二コリント書」において、[2] イエス・キリスト出現以前のイスラエル民族の聖典、すなわちモーセによって与えられ、史家、予言者、詩人などによって伝えられた神との契約を「古い契約」[3] とし、これに対してキリストを通して与えられ、聖霊降臨によって公布された契約を「新しい契約」と呼んだところにあるとされる。もっともこの言葉はすでに「エレミヤ書」[4] にあり、パウロの造語とはいえない。このことは、新約聖書の生命観が旧約聖書のそれ[5] と微妙につながりつつも、新しい要素が加わっていることを暗示している。そしてその中心は罪のゆるし、すなわち罪の問題とその解決の問題である。この救済論的観点をはずして、新約聖書の人間観・生命観を正しく理解することはできない。

2.

さてイエスの宣教の中心は「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」[6] の一句に要約される。ここに「神の国」（basileia tou theou）とは神の意志が支配力を持つ領域であって、昔イスラエルが「聖き民」[7] として神の統治の下にあり、全人類にその告知と実現を使命としたところである。しかしイスラエル民族との間に結ばれた「旧き契約」はそのままでは守られず、「新しき契約」は以後人びとの心の肉碑に記されるとされる。[8] しかもこの「新しき契約」をもたらす救い主は第二イザヤに至って「苦難の僕」とされ、救はその僕の苦難の死を通してもたらされるとされた。[9] 神の支配を告げるイエスの呼びかけ、すなわち「福音」（euangelionよいたより）にはこのような含

山梨医科大学哲学・倫理学
（受付：昭和62年9月11日）

みがあるとともに、それに答えて生きるあり方（信仰）には従来の生活からの180度の転換（悔い改めmetanoia）が必要とされるのである。

イエスはこの消息を人びとに悟らせるために、その到来の現実性を数多くの「奇蹟」[10]で示し、神の支配のあり方を数々の「譬話」[11]で語った。それゆえこれらの奇蹟物語や譬話は元来、救済物語（罪の問題の解決）の脈絡の中でとらえられるべきものであって、それ以外の側面に着目する場合には見当違いとなることが多い。しかもイエスはその神意の実現と保持のために、これらの奇蹟と譬話を示し語ったのみならず、いやされ赦さるべき弱者や罪びとの重荷をみずから負い、中傷と迫害を受け、ついには十字架の死に赴くことを避けなかった。そしてこのことこそ神の支配の到来を示す最大の奇蹟であり譬話だとも言える。病のいやし（肉体の健康回復）は罪のゆるし（神との正しい関係の回復）を基礎としてはじめて十全の意味を発揮できるのである。

イエスはみずからこれをなすためにたえず神の力を祈り求めたが、その神の力、神より出ずる愛の創造的エネルギーとでもいうべきものを聖霊（pneuma hagion）と呼んだ。そして聖書によれば、悔い改めて罪のゆるしを受け、神との関係の回復のうちに新しき人間として生きる、いわゆる復活・新生の力も、この聖霊による出来ごとにほかならない。[12]ここに新しき生命の発現がある。

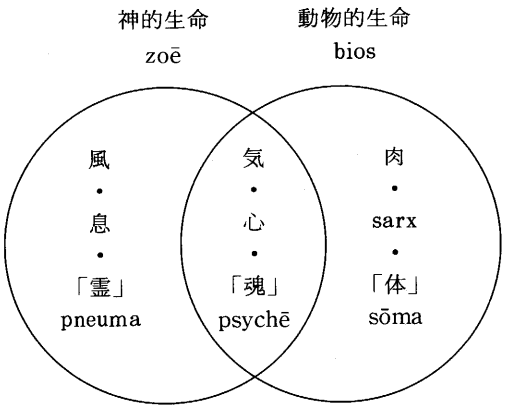
3.

ペテロをはじめとするイエスの直弟子たちは生前のイエスに親しく接して、その言葉とわざとを見聞していた。しかしイエスの使命に対する理解は人間的共感を遠く出なかった。その犠牲の生涯の意味を知り、彼を通して神が語り、審き、赦し、新しく生かす力を与えていることを痛悔の思いと報恩の願いとをもって証ししたのはイエスの死後においてであった。その消息は「使徒行伝」の前半[13]に明らかである。

これに対して、生前のイエスに親しく接することなく、もっぱらユダヤ教に精進し、それゆえにイエスの弟子たちに対する迫害者となり、のちに回心して熱烈なキリスト教伝道者となった一人がパウロである。[14]

彼の回心（悔い改め）の記事は、彼が以前ユダヤ教の代表的信者の一人であったゆえに、旧約聖書の信仰と新約のそれとの連続と断絶の両側面を示して極めて興味ぶかい。[15]生命の主たる神との関わりを、民族に与えられた律法によって確保しようとした彼は、自らが迫害した者たちに接し、おのがうちに民族主義・律法主義の破れを知らされた。そして彼らを生かした生命の主たるイエス・キリストの力こそ、神に由来する愛の創造的力（聖霊）に基くものであり、十字架はその力の顕現にほかならず、ここに顕われた神の人への呼びかけに答えて新しく歩むことこそ、生命の主たる神とのまことの関わりに生きることであるゆえんを悟り、これを信仰（pistis）と呼んだのであった。

しかも彼は当時のヘレニズム・ローマ文化の空気をも熟知し、この文化が着目した宇宙の法、自然の法、人間の法が、聖書の神とキリストの救いに生きる人間にとっては、その絶対性を否定されながらも、それぞれの正しい位置づけを与えられ、生命力を得てくる所以を力説した。こうして彼は当時の全世界にイエス・キリストの救いと新生の福音をもたらす器とされたのである。その彼にとってイエスは、まさにキリスト（救い主）として、信仰をもって受くべき、神の愛の啓示者、把握者、実践者であった。それゆえに彼の人間観はもはや単純にヘブル的人間観ではなく、これにヘレニズム・ローマ的人間観を加味したものとなった。彼の語る人間の構成部分の区別は、時には重複していることもあって、あまり明瞭ではないが、かりにこれを図式化してみると次のようになろう。[16]



これを旧約聖書の生命観に比較すればプネウマはおおむね旧約のルーアハに、プシューケーは旧約のネフェシュに、ソーマは旧約のバーサールに当るということができるであろう。しかし注目すべきは、まず(1)人間の中心をプシューケーとし、これをプネウマとソーマとの間においたため、霊肉が旧約におけるごとく密接不離の関係ではなくなったこと、および(2)人間をプシューケーとソーマよりなるとするヘレニズム・ローマ的人間観の特質が、その上にプネウマを置く聖書的人間観によって補足されたことである。そしてこれは人間を神による被造物としながらも、なお救済を必要とする存在ととらえる旧約伝来の人間理解からみて、きわめて当然のこととうけとられるであろう。

4.

パウロが踏み出した生命把握、人間把握をさらに押し進めたのは、霊的福音書といわれる「ヨハネ福音書」の記者である。すなわちここでは霊は肉に対立するものとしてとらえられ、それによってギリシア的二元論的人間把握にいっそう近接する姿を見せつつも、罪のゆるしと救いを霊による新生と語り、霊の役割を強調することによって、イスラエル伝来の創造論を推進している。

イエスの宣教第一聲として挙げたさきの言葉[17]に対応するものは、ここでは「神はその独り子を賜わるほどに世を愛してくださった。それは彼(イエス・キリスト)を信ずる者が一人も滅びないで、永遠の生命を得るためである」[18]という言葉であろう。ここに「永遠の生命(zōē aiōnios)とは、神の国にある者、すなわち神とともにある者、に与えられる生命[19]のことで、ヨハネ文書に圧倒的に多い表現である。[20]この生命の与え主は究極的には神であるが、神意によるその直接的与え主はイエスであり、その意味で彼は救い主(キリスト)なのである。「わたしが命のパンである」[21]とか、「わたしが与える水はその人のうちで泉となり、永遠の生命に至る水がわき上るであろう」[22]といった、一見不可解に見えるイエスの言葉はこの意味で語られているといっていい。

しかもヨハネ福音書のイエスはそのパンが「世の命のために与えるわたしの肉である」[23]と語るとともに、「人を生かすものは霊であって肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」[24]ことに注目させ、いままで見てきた救済論の枠組の中でこれが語られていることを示している。イエスの十字架の死は、生命の源たる神への反逆によって滅びんとする人間の罪を解決して、新しき生命、神との交わりに生きる人生への、信仰によって受くべき転換点であり、これこそ人間が学ぶべき最大の真理であるとされる。「私はよみがえりであり、命である。私を信ずる者は死んでも生きる」[25]とか、「私は道であり、真理であり、命である。私によらないでは誰も父のみもとに至ることができない」[26]とかいうイエスの言葉はこの意味で理解することができるであろう。ヨハネにとっては、イエスのこの救済の業こそ、神の天地創造、人間創造にも比すべき第二の創造であった。[27]

5.

新約聖書が、旧約聖書同様、その生命観・人間観の中心に、罪のゆるし、救済の出来ごとをもっていること、この中心を共有しながら、たとえば共観福音書[28]の伝えるイエス像、パウロの思想、ヨハネの思想といった代表的記事の間に微妙な相違のあることは上述の通りであるが、新約聖書における病気の把握の仕方もほぼこの相違に即応している。

たとえば共観福音書には次のようないやしの例があげられている。

［イエスのいやし］	マタイ	マルコ	ルカ
1．癩病人のいやし	8: 1- 4	1:40-45	5:12-16
2．百卒長の少年	8: 5-13	—	7: 1-10
3．ペテロの外姑	8:14-15	1:29-31	4:38-39
4．ガダラの悪霊憑	8:28-34	5: 1-20	8:26-39
5．中風者のいやし	9: 1- 8	2: 1-12	5:17-26
6．ヤイロの娘と血漏の女	9:18-26	5:21-43	8:40-56
7．二人の盲人	9:27-31	—	—
8．悪鬼による唖者	9:32-34	—	—
	12:22-24	3:22	11:14-15
9．なえたる手の人	12: 9-14	3: 1- 6	6: 6-11
10．ナインの若者	—	—	7:11-17
11．カナンの女の娘	15:21-28	7:24-30	—

12. 湖畔のいやし	15:29-31	7:31-37	—
エパタ(開け！)	15:29-31	7:31-37	—
13.ベツサイダの盲人	—	8:22-26	—
14.癲癇のいやし	17:14-21	9:14-29	9:37-43
15.十八年病める女	—	—	13:10-17
16.水腫者のいやし	—	—	14: 1- 6
17.十人の癩病人	—	—	17:11-19
18.バルテマイの開眼	20:29-34	10:46-52	18:35-43

この表に、いくつかの文献[29]から学びえた若干のコメントをつけ加えておこう。

1.の癩病（Heb.tsara^{c}ath神に罰せられ、打たれた者）は「レビ記」13章から判断すると、厳密な意味でこんにちのレプラを意味するとは限らず、種々の皮膚病さらには家や衣類を冒すカビの類をも含んでいたと思われる。

2.の症状は「中風」とも訳されているが、この原語paralutikosは「麻痺」とも解され、前後関係からこのほうが適切ではないかと思われる。また痛風、関節炎を考える学者もある。

3.は「熱病」「高熱」とあるのでマラリヤあるいはビールス性熱病のパッパタチナ熱、刺蝶蝿熱（sandfly fever）などかと考えられる。

4.の「悪霊憑き」とは精神錯乱の状態のこと。

5.の「中風」の原語は2.と同じ。（a）若年性の脊髄炎または脊柱カリエスのための麻痺、(b)精神的ストレスから起る一種のヒステリー性の麻痺などが考えられる。

6.のうちの「娘」について、ある学者は昏睡または仮死状態であったと解している。また「女」は孤立粘膜下繊維腫（solitary submucons fibroids）か子宮内膜ポリープ（endometrical polyp）との説がある。

7.最近、感情が緑内障に重大な影響を与えることや、憂鬱、恐怖、不眠が眼病に著しい悪化を来たすことが明らかにされている由。

8.聴器、聴神経、聴中枢、感覚性言語中枢、運動性言語中枢、発声器に対する末梢運動中枢、またその末梢経路の構成する反射弓のいずれかの部分に、生前か生後、何らかの器質的•心因的障害を受けた場合、唖となるといわれる。

9.たとえば筋萎縮性側索硬化症。

10.風土病、消化器病、腫瘍などで死んだものか。

11.娘（to thygatrion）は七才未満か。舞踏病、ヒステリー、癲癇の症状で始まる小児の躁病が考えられる。

12.症状「耳が聞こえず、口がきけない」。聴覚を回復して舌のもつれをとかせるイエスのこの治癒法は非常に近代的といわれる。

13.古代エジプト人はつばきが盲目の治癒に効果があると考えていた。純粋な唾液はアルカリ性でホルモン作用があるという。

14.癲癇発作は古来、大脳内の機能障害で起ることがわかっているが、適確な原因は広般な生化学的、生理学的研究にもかかわらず、依然として不明だといわれる。

15.ヒステリー性麻痺、脊髄炎、骨炎（osteitis）、失調性対麻痺が考えられる、という。

16.「水腫」は体腔内または組織内に異常な分量の組織液やリンパ液がたまる病気である。脚、手、顔、腹部が水ぶくれにより腫れてくる。心臓病、腎臓病、肝臓病、カッシング氏症候群、粘液水腫、甲状腺機能亢進症などで起る、という。

18.トラホーム、角膜炎、外傷などで盲目になった後天性の盲人であったと思われる。

6.

上にあげた共観福音書中の病気のいやしは科学的医療による診断と処置がなされなかった地域のことでもあり、また目撃者の報告から伝説に至るまで、さまざまの伝承過程を経ているため、その真相が容易に確定できないものもある。それゆえコメントに記された病名の同定には単なる臆測の域を出ないものもあろう。しかしこれらのうちの多くは、直接間接に、心因性（psychogenic）のもの、もしくは心因がそれに与かっているものであり、精神の安定もしくはその健全な活動が、そのいやしにプラスになっていることは十分に考えられる。

とはいえ、始めから見てきたように、聖書における病気のいやしは、生命の主としての神の力の介入（奇蹟）と考えられており、罪からの救いという、救済論的意義が問われていることを忘れてはならない。「わたしは主であって、あなたをいやすものである」[30]という旧約の言葉は、新約にもあてはまるのであって、

生命の根源、回復力の与え手を神といい表わしていると見れば、それはこんにちでも通用することであろう。そしてこの神の力の告知者、伝達者、行使者がキリストとされているのであって、彼が神の国の到来を告知したのみならず、その徴として、聖霊によって悪霊に打ち勝ち、人間を縛りつけている種々の呪縛から解放し、神より与えられた生命の喜びのうちに人を生かしている。彼はまさにその意味で、人間のいやし手、救い主であった。いま彼はさらに進んで「われらのわずらいを身に受け、われらの病を負うた」[31]存在となったとさえ言われている。イエスの十字架の光はここにも指し込んでいる。彼の「受難の意義は、苦しむ人類の一員となって、ついにその悪を滅ぼすことにあった」[32]からである。

共観福音書中の各書は以上の点を共有しながら、それぞれの特徴をもとどめている。すなわちマルコ福音書では、イエスが病気の一原因とされていた悪霊と対決してこれに勝利したこと、および病気の治癒そのものに気をとられて神との関わりを失念することがないように戒めたこと、の二点が目立っている。またマタイ福音書では、救いといやしについての旧約の予言の成就たる点が目立つ。ルカ福音書では、医者たる著者にふさわしく、いやしと救いの人間的側面に十分な注意を払いながら、奇蹟物語がえてして強調しがちな荒唐無稽な点をできるだけおさえている。

パウロは、前述のように、人間イエスのキリストとしての側面を前面に出した人であるが、彼は病気のもつ自然的、人間的側面よりも、その救済論的意味を深化している。すなわち彼は、みずからの病気[33]についても「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」[34]というキリストの言葉を答として受けとっている。

また「ヨハネ福音書」は、その前半において、世におけるイエスの奇蹟的仂きをのべ、病者のいやしについても、その力ある驚くべきわざを、全能なる神の子のしるし (sēmeia) として語っている。それゆえにたとえば「ベテスダの池のほとりでの三十八年間病気に悩んだ人のいやし」[35]とか、「生れつきの盲人のいやし」[36]、さらに「ラザロの復活」[37]のように、病いにも死にも打ち勝った救い主（メシア）としての終末論的力を現わしている。信仰をもって受け入れるほかはない、まさに文字通り言語道断の境地である。

7.

病気をも救済論の枠組でとらえる新約聖書は、死をも同じ枠組でとらえる。そしてその出発点は死をおのがことと受けとめることである。自分が身をもってこれととりくむことである。それゆえ聖書は死を単に、生物の生活機能の停止、といった自然現象として片づけてしまうことをしない。科学は自分の体験をカッコに入れる限り、客観的ではあるが、傍観者的である。とはいえ聖書の死生観は、死を避けえないものであるゆえに、悲しい運命的なものであるとする、抒情的詠嘆に足をとられることもなく、また、万物を空と観ずる悟りのうちに透徹した諦念を持つという方向にも進まなかった。それはよく生きてこなかったことへの悔恨、親しい人びととひとり別れて行く淋しさなどからくる、恐れと孤独感という事実に根ざし、この事実の根底に、良心の呵責と、根源的生命よりの離脱という、いわば倫理的宗教的側面から、聖書のいう罪把握に至るのである。

旧約聖書「創世記」[38]は罪の起源を、神の配慮へのアダムのそむきとしているが、パウロはそれを、あたかも遺伝現象のように扱って、全人類に及ぼした。[39]しかしこの（のちに原罪peccatum originaleといわれるようになったものの）説明法は、当時の神話的ないしはラビ（ユダヤ教の聖書解釈学者）的論法であって、人間の罪の傾向の根本性・普遍性・伝染性・連帯性を示したものととれば、こんにちもこれを各自のうちに認めることができるのではないか。こうして万人の体験する死は、万人の体験する罪の結果[40]であることが首肯されるのである。

しかしまた人間は一人では生きられないこと、および、人間関係の破れはとりなしによって回復されることもまた、万人の体験するところである。いな、いっそう深く考えれば、個体としての生は、他の犠牲において、その存立を全くしうるのみならず、みずからも他を生かし育てるのに役立つことによって、その生命を他に伝達し、生命の根源にして創造者なる神の意図に副うことになる。「創世記」に神の像（tselem）[41]といわれるのはこのような人間のあり方である。「イザヤ書」によればこれが現実の人間に回復されるのは、罪なきもの、神意に叶ったもの(義人)が犠牲とされる

ことによってであって、そこに示された苦難の「主の僕」('ebed yahweh)の姿はそれを指し示している。[42]

新約はその実現と成就をイエスの十字架に見る。このイエスの生死がわがための犠牲であり、これによって神とおのれの関係が回復されたことを知り、それへの感激と感謝のうちに、これに答えて生きる人間のあり方が信仰とよばれるものである。そして信仰によって神とのつながりのもとにある（神の国にある）人の生命こそ「永遠の生命」とよばれるものであり、これある時、死のもつ棘ともいうべき、恐れと孤独とはとり去られるのである。倫理的宗教的意味における死の問題が解決されるのはこのような時であって、このあとに訪れる死は単なる肉体的、生物学的な死にほかならず、人格的には信頼と委托に基く眠り（koimesis, koimao）とよばれるのである。[43]

8.

「しかし事実 キリストは眠っている者の初穂として死人の中からよみがえった」[44]とパウロは言う。これが彼一人の経験ではなかったことは、彼が次のように書いていることでもわかる。

> わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわち、キリストが、聖書に書いてある通り、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてある通り、三日目によみがえったこと、ケパ（ペテロ）に現れ、次に十二人に現れたことである。そののち五百人以上の兄弟たちに同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまもなお生きている。そののち、ヤコブに現れ、次にすべての使徒たちに現れ、そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも現れたのである。[44]

この事実はこの記事だけでは、まことに唐突不可解にみえるが、実は、旧約以来の長い歴史のうちに信じられ、待望されてきたことであった。生命の主なる神は、万物を創造保持する存在であるゆえに、春ごとに訪れる大自然のよみがえりも、[45]陰府にある者への支配も、[46]その力のうちにある。イスラエルの死せる様よりの復活も、[47]再起も、[48]その力のうちにある。生者の新生についてはすでにふれたが、死人の復活についても「(終りの時)地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますであろう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と限りなき恥辱をうける者もあるであろう」[49]ともいわれているのである。

この最後の引用は旧約における黙示文学の示す終末観の代表的なものであるが、このような歴史の見方、人生の見方は、イエスの復活についての問答、[50]共観福音書にみられる終末予言[51]のように、イエスの時代においてもうけつがれ、語られていた。そしてほかならぬイエスも、死人をよみがえらせた[52]だけでなく、自分の復活をくりかえし予言していた[53]のである。しかしイエスの直弟子たちにも、このイエスの言葉はイエスの生前には不可解であったらしい。彼らはこの言葉に伝統的黙示文学の不気味な、しかしいささか幻想的な口調を感じていたかも知れない。

これが弟子たちのうちに疑うべくもない事実として定着し、以後の彼らの生活の原動力となったのはイエスの死後であった。彼らはイエスの文字通り生死をかけての神の愛の提示によって、それまでのイエスとのあり方を、深い悔改の思いをもって、根底的に一変され、その背後に、神の力の仂きをはっきりと感じとった。そして生命の主なるこの神の力の仂きによって新しくされたのは、なおこの世の生にある弟子たちだけではなくて、この世の生を終えたと考えられていたイエスの生命が何よりもそうであった。イエスの死よりの復活の予言と、それを可能にする神の力の呈示としての奇蹟が信仰的事実として承認されたのである。

このイエスの復活によって、いまや旧約伝来の復活信仰、終末観に事実上の基礎が与えられることになった。生命の主、歴史の主なる神の力の呈示が全世界全人類全歴史の上に、やがて現われるであろうとされた。しかもこれは単なる待望ではなく、すでに与えられた人格的事実に基く確信となった。こうして「エゼキエル書」に予言され、「ダニエル書」に画かれた、枯骨の復活、死人のよみがえりは、このイエス・キリストの復活によって確実な基礎が与えられた。

パウロはこの章冒頭にあげた「コリント第一書」の「復活の章」とよばれる箇所において、この信仰の上に立って、死者の復活と終末の到来を語り、死そのものの克服の讃歌を高らかに歌うのである。[54]

9．

このように見てくるならば、新約聖書の生命観、ことに人間の生命観が、その問題性を旧約以来持ちつづけ、ついにイエス・キリストにおいてその核心にある罪と死の問題にふれつつ、これを人格的・信仰的に解決して、新しい生のあり方、復活の生命を示していることが承認されるであろう。この新しい人間創造とでもいうべきできごとは、生死の主としての神の力にまつべきものであり、それをおのれのうちにも認め、受けとり、これに答えて生きるところに信仰と希望があることもくりかえしのべたところである。

しかも神の力は単なる生命の再創造にとどまらず、さらに天地の再創造に及ぶ。これが「ヨハネ黙示録」における新天新地の出現、神の国とそこに住む人間の姿、人間本来のあり方の回復である。

わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地は消え去り、海もなくなってしまった。また聖なる都、新しいエルサレムが夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下ってくるのを見た。また御座から大きな声が叫ぶのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものがすでに過ぎ去ったからである。」[55)]

ここに宇宙の完成、歴史の大団円、人間の創造と救いの完成がある。しかしそれはこの世における完成・団円でもなければ、人の力による実現でもない。あくまでも天地の主・生命の主たる神のわざである。天地をつくり、その中の生命をつくった神は、その創造と保持のわざを、人間の罪やそむきにもかかわらず、貫徹する。キリストにある者は自らの信仰体験に照らして、このことの事実であることを信ずる。これを信じてわが人生をこの神の計画のうちに置き、生命を育くみ生かす器として、とり用いられることを祈り、生きる。ここにキリストを信じる者の倫理の中心がある。

最後に注目したいことは、さきほどから見てきた黙示文学は、イスラエル民族やキリスト者の群の、平和な時にではなく、危急存亡の非常時に記されたということである。そして彼らを取り巻く現実の事態に、流されず、心奪われず、これと戦って、まことの人間のあり方を貫徹すべく励ますための文書として読まれたということである。

イスラエル民族は、そしてこれをうけつぐキリスト者たちも、天地人生の始源と終末、またその過程を単なる好奇心から考察するのではなく、自他を含む厳しい社会現実の中で、時には自他をも崩壊させてしまうような大きな試練の中で、人間としてのあり方生き方を求めつづけ、自己の失敗を通して、神・世界・人間の何たるかを知らされた。それゆえに彼らの生命探求も、信頼・希望・愛という、人間が人間として生きて行く上になくてはならぬ精神的要素をうちに含んだ探求であり、その根源としての神と、人間に対する神意の告知者、賦与者、実現者としてのイエス・キリストをその基礎に発見させられたことがわかるのである。

信頼・希望・愛という、およそ人間性にとって不可欠のこれらの特質が、その存在をきびしく問われているこんにち、以上みたような、聖書の示す生命観の消息を、おのがこととして顧みることは、以前の日本のいかなる時代にもまして必要なことではなかろうかと考えられる。しかもそれを従来の西欧的思考の枠組から理解するのではなく、できるだけこれを聖書の語る直接的使信に汲み、普遍的人間性の原体験に照らし、われわれの生き方と照応させながら、理解・摂取することがいっそう大切ではないかと考えられる。本稿は――前稿とともに――そのための一つの小さなヒントにすぎない。

注

1）『マルキオン駁論』第4巻第1章その他.
2）「第二コリント書」3章5－18節.
3）たとえば「出エジプト記」24章6－8節.
4）「エレミヤ書」30章31－40節.
5）拙稿「旧約聖書の生命観」（『山梨医科大学紀要』第3巻（1986）32－39）.
6）「マルコ福音書」1章14節.
7）「出エジプト記」19章9節.
8）「エレミヤ書」30章31－40節.
9）「イザヤ書」53章1－12節など.
10）のちにその「いやし」の面だけを5•6章に論ずる.

11) 例、「毒麦、芥種、パン種、隠された宝と真珠、曳網」（マタイ13章1－50節）、「種まく人、芥種」（マルコ4章1－34節、ルカ8章4－18節）、「ブドー園の仂き人」（マタイ20章1－16節）、「悪しきブドー園の農夫、王子の婚筵」（マタイ21章33節－22章14節）、「悪しきブドー園の農夫」（マルコ12章1－12節、ルカ20章9－19節）、「盛大な晩餐会」（ルカ14章15－24節）「二種の僕、十人の乙女、タラントの譬」（マタイ24章45－25章30節）、その他.
12) 「使徒行伝」2章その他.
13) 「使徒行伝」1－12章.
14) 「使徒行伝」13－28章.
15) 「ガラテヤ人への手紙」1章14節以下、「使徒行伝」7章59節、8章1－3節など.
16) 「テサロニケ人への第一の手紙」5章23節、「ローマ人への手紙」8章2－11節、「ガラテヤ人への手紙」5章13－26節など、なお山谷省吾『新約聖書神学』昭41、100－108その他参照.
17) 本稿第2章冒頭.
18) 「ヨハネ福音書」 3章10節.
19) 旧約ではchayye 'olamの語で「ダニエル書」12章2節に、終末論的脈絡ででてくる.
20) 福音書に16回、第一書簡に7回.
21) 「ヨハネ福音書」6章35および48節.
22) 同上4章14節.
23) 同上6章51節.
24) 同上6章63節.
25) 同上11章25節.
26) 同上14章6節.
27) 同上（プロローグ）1章1－18節.
28) Synoptic Gospels、マタイ、マルコ、ルカの三福音書、資料的に共通点が多く、共観、比較を通して理解が深まるゆえにこの名が出た.
29) J、Hastings, A Dictionary of the Bible, vol、3 (1900)321－33.
The Interpreter's Dictionary of the Bible,vol、1 (1962)847－854.
『新聖書大辞典』（キリスト新聞社、昭46）1149－54.
F.Fenner,Die Krankheit im Neuen Testament, 1930、C.R. Smith, A Physician Examines the Bible,1950、 A.R.Short, The Bible and Modern Medicine, 1953,47－123.
30) 「出エジプト記」15章16節.
31) 「マタイ福音書」8章17節、「イザヤ書」53章4節より.
32) Vocabulaire de theologie Biblique,1970,Paris,Les editions du Cerf（邦訳『聖書思想事典』三省堂、720）.
33) パウロの病気については、マラリヤ、癲癇、頭痛、眼病などの諸説がある.
W.M.Ramsay,St.Paul the Traveller and the Roman Citizen, 1897. London, 94－97.
H.D. Wendland, Die Briefe an die Korinther, 1954, Gottingen,（NTD.7）224－5、参照.
34) 「コリント人への第二の手紙」12章9節.
35) 「ヨハネ福音書」5章2－9節.
36) 同上9章1－7節.
37) 同上11章1－44節.
38) 「創世記」2章17節、3章19節.
39) 「ローマ人への手紙」5章12－14節.
40) 同上6章23節.
41) 前注5、第七章.
42) 「イザヤ書」53章1－12節など.
43) 例「ヨハネ福音書」11節11－15節.
44) 「コリント人への第一の手紙」5章3－8節.
45) 「創世記」1章11－12節.
46) 「詩篇」139篇8節.
47) 「エゼキエル書」37章1－4節.
48) 「イザヤ書」60章1節.
49) 「ダニエル書」12章3節.
50) 「マルコ福音書」12章18－27節、「マタイ福音書」22章23－33節、「ルカ福音書」20章27－37節.
51) 「マルコ福音書」13章1－27節、「マタイ福音書」24章、「ルカ福音書」21章5－36節.
52) 前掲「イエスのいやし」のうち6、10および「ヨハネ福音書」のラザロの復活.
53) 「マルコ福音書」8章31節、「マタイ福音書」18章21節、「ルカ福音書」9章22節、「マルコ福音書」9章30－32節、「マタイ福音書」17章22、23節、「ルカ福音書」9章43－45節、「マルコ福音書」10章33－34節、「マタイ福音書」20章17－19節、「ルカ福音書」18章31－34節、なお「ホセヤ

書」6章2節参照.
54）「コリント人への第一の手紙」15章50－58節.
55）「ヨハネ黙示録」21章1－4節.

Abstract

The New Testament views of life

Shigeru KAWADA

The New Testament (NT) views of life presuppose that of the Old Testament and, in some points, supersede them. This article, discussing the relevant texts of some representative authors in NT, tries to elucidate main features of NT views of life. In Jesus' miracles and parables, we can recognize the reality of the Kingdom of God, in which man enjoys right relation with God himself, the creator and sustainer of life. For Paul, to whom Jesus revealed himself as a spiritual reality from the outset, Jesus was Christ, the saviour and at the same time the revealer of wider domain of human life. For John the evangelist, Jesus is the Son of God, the way to God, truth and life, and those who believe in him actually enjoy eternal life, the life in the Kingdom of God, where there is no death. Then follows some discussion on NT views of disease, death and resurrection. This piece ends with an examination of eschatological view of life in NT, and suggests that this is the final and most important basis of Christian faith, hope and love.

Department of Philosophy and Ethics.